

竜堂学園怪談部

麻醉屋 兎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

校舎が新しくなり、スポーツ系の部活や文系の部活等も発展し、勉学も優れているこの学園で様々な噂が流れていく。生徒達が嘘を付いて流れた噂もあれば事実もある。生徒達は怖がりながらも恐怖を求める！しかし幽霊等は実在する。幽霊関係で困った時は旧校舎の幽霊に相談すれば良い！と言う。その旧校舎には夜になると幽霊が出てきて、一番奥の部屋に怪談部と言う物があるそこを訪ねると良いと、この物語は新聞部長の主人公ギンとその部員の佐々木君が送る怪談退治の物語である

目次

竜堂学園旧校舎幽霊の正体	1
竜堂学園七不思議その1 無限回廊	4
竜堂学園七不思議その2 人形さん	18
竜堂学園七不思議その4 番犬チル前編	31
竜堂学園七不思議その4 番犬チル中編	34

竜堂学園旧校舎幽霊の正体

竜堂学園、ここらの学校ではとても人気な学校である。昔からの伝統が沢山あり学食や購買のパン等が物凄く美味しいと言われ、スポーツでは毎年全国大会に出場し、制服も可愛い！格好いい！等のコメントが多いこの学園だが、一つだけ不思議で怪しい所がある。本舎から東にある木造建築の旧校舎である。ここには小さな女の子の幽霊が居るとか、この校舎に入ったら呪われるなど様々な噂がある。しかしこの旧校舎でたった一つだけ使われている部屋がある。その部屋の扉には新聞部と大きく書かれた紙が貼っており、その部屋で小さな身長とは似合わない大きなカメラをリズム良く磨いている少女が居た。

少女「よし！バっちしだね！私のしーちゃん今日も綺麗だよ！」

少女は自分のカメラに話し掛けながらカメラを机の片隅に置き、一枚の紙を取り出した。その紙には鳥居が書かれており左にはYesと右にはNoとその下にはあくまでの五十音表が書かれており、どこからどう見てもこっくりさんをするための紙だ。そして少女はポケットから十円玉を取り出した鳥居に置き

少女「こっくりさん、こっくりさん、おいで下さい。」

おいでくださったら、お返事を下さい。」

十円玉はYesの方向に移動した。

少女「今年はこの部活に新入生は入ってきますか？」

十円玉は鳥居に戻り、またYesの方向に動いた後に「がんばれ」という文字に動いた。そして鳥居に戻った

少女「こつくりさん、こつくりさん、ありがとうございます。お帰りください」

少女は机のカメラを取り首に掛け、お気に入り鹿撃ち帽子をかぶり部屋を出た。

ギン「白露銀行ツ来まーす！」

少女は旧校舎を出て、本舎の中庭の木陰に隠れた。二時間後、約18時過ぎまで少女はカメラを構えてスタンバって居た。

ギン「これからが本番だ！夜はお化け達が出やすい時間帯！まだ、これからだ！」

その時！少女の背後から手が出てきた！その手は少女の制服の襟を掴み持ち上げた。

ギン「まさか！お化けっ！」

少女が言葉を言い終わると同時に大きな音が響き渡った！少女はうつ伏せになり頭を押さえている。その手が少女にゲンコツをお見舞いしたのだ。

ギン「お姉ちゃん！痛いよお！」

少女の姉 白露蒼 が少女の頭を叩いたのだ

蒼「あんたがお化けなんて言うからでしょ!! 帰ってくるの遅すぎなのよ! 早く帰るわよ!」

少女は自分の姉に引っ張られながら帰って行きました

ギン「明日も絶対にお化け見るぞ!!」

蒼「うるさいわよ!!」

また大きな鈍い音が響き渡った

竜堂学園七不思議その1 無限回廊

キーンコーン、カーンコーンと学校独特の鐘の音が鳴り響く。今日は竜堂学園の入学式である。約200人近くの新入生達が胸を弾ませながら緊張共に立っている。この佐々木翔もその一人である。身長も平均、スポーツや勉学等も平均と言うある意味凄い普通の男子である。中学校生活では特に活躍もしなかった彼は高校生活では絶対に青春してやる!!と強い思いがありこの学園に入ったのだ。

そして入学式が終わわり、それぞれ入りたい部活等に見学しに行っている頃だ。しかし、佐々木君はというと

佐々木「どうしよう!入りたい部活なんて考えて無かった!これじゃあ中学の時と同じじゃあないかー!」

佐々木君は一人寂しく玄関から出たときふとある建物が目に入った

佐々木「あれは…」

その建物とは旧校舎である。佐々木君は何を思ったか知らないがその場所へと歩いて行った。

佐々木「……………ゴクリッ」

佐々木君は唾を飲み込んだ、佐々木君は既にこの旧校舎の噂を知っていたのだ。

佐々木「怖いけど……」

佐々木君は足を震わしながらも足を踏み入れた

佐々木「……外から見るよりは以外と綺麗だな」

佐々木君がゆつくりと歩いていと階段から

ギン「そりゃあ、1週間に1回掃除してるからね」

と少女が歩きながら言った。

佐々木君は目をパチクリさせながらギンを見ている。目の前に髪を二つに括り、頭には探偵が被つていそうな帽子を被っている低身長の子があるいてきているのだ。

その小さな女の子は佐々木君の目の前に立ってこう言った、

ギン「もしかして、新入生の子?!」

目をキラキラさせながら言った。佐々木君はすべてを理解したかのような笑みを浮かべて、女の子の身長に合わせながら座り、

佐々木「どうしたの？迷子？お兄さんが一緒に親御さん探して上げるからね。ここから出よう」

と子供を手懐けるかのように言った

その時のギンの顔と言ったら鳩が銅鑼太鼓の音を聞いたかのように驚く間もなく真

顔の状態で口が開いてる

ギン「え……私先輩だよ。冗談きついよ君」

佐々木「ほら、君の親御さん達心配するよ。」

佐々木君は真剣な顔をして言った

ギン「ちよつ！ちよつと待つて！いや…制服着てるよね！」

そう言いながらブレザーの内ポケットから学生証を出した

佐々木「すみませんでした!!本当に先輩だとは知らずに！」

新聞部の部屋で頭を深く下げて言った

ギン「分かれば良いんだよ。分かれば！」

ちよこんと座りイスをクルクルと回転させながら言った

佐々木「すみません、てっきり迷子かと思つて、本当にすみません」

ギン「また、言ったー！どこからどう見たら迷子に見えるのよ！」

佐々木「本当にすみませんでした！」

ギン「これだから最近の学生は、どうせ君も暇でこんな所に来たんでしょ！」

このギンの言葉は佐々木君の胸に酷く突き刺さった。佐々木君は少し根に持ったらしく

佐々木「先輩、はつきり言いますけどね！」

ギン「なによ……」

佐々木「先輩と僕の身長差は2、30cm位離れてるんですよ。いくら制服着ても見間違えますよ」

ギン「うっ……………」

佐々木君はギンが最も気にしている事を言ってしまったのだ。

ギン「うう……………それで君はいつたい何しにこんなぼろ屋敷に来たんだい……………」

ギンは今にも泣き出しそうな顔をして尋ねた

佐々木「あ……………え、ここに変な噂があるって聞いたもんで、それで」

ギン「君も怪談好きなの?!」

ギンはガシヤン!と音を立てながらイスから降りて、言った

佐々木「ま……………まあ」

ギン「良かった!仲間がここに居たよ!」

佐々木「はあ……………(うわあこの人と同じにされるなんて嫌だなあ)」

ギン「じゃあ、早速これに名前と住所と電話番号書いてね」

佐々木君は不思議な顔をして紙を受け取った。

佐々木「これって……………入部届じゃないですかー!!」

ギン「そうだよ」

ギンは不思議そうに首を傾げていった

ギン「嫌だつてここに来たつて事は新聞部に入部したいつて事だよな」

佐々木「別に入部しに来た訳じゃないですし、」

ギンはえー！と大声をだし、イスに座つてまた回り出した。

ギン「じゃあ、何か怪談話してくれたら帰つていいよー」

佐々木「えー、」

佐々木君は困つたような顔で語り始めた

佐々木「この学園の新校舎に変な噂があるんですよ。」

ギン「いいね。いいねー」

ギンは急に興味が湧いたようにイスを止め、佐々木君を見る

佐々木「二階の1年生の廊下なんですけど、夜8時頃に学校に肝試しをしに来た子の

一人が廊下で行方不明になつたんですよ。」

佐々木君は雰囲気を出しながら言つた

ギン「それで！それで！」

佐々木「いや、これでお終いですけど……」

ギンはなくんだ、つままないあと呆れた用に言つて立ち上がった

ギン「じゃあ、8時に本舎前に集合だよ！」

佐々木「え、！なんで！」

ギン「そりゃあ、お化けを見たいから、後、行方不明になった子も探すから」
ギンは当たり前じゃんと言うような顔で言った

佐々木「何で僕も?! てかっお化けなんて居るはずが無いですよ！」

ギンはその言葉に鋭く反応して、

ギン「お化けはいるよ！」

とだけ、言つて部屋を出て行つた。

佐々木君は呆れた顔をして旧校舎を出た

20時00分、佐々木君は本舎の玄関に立っていた。

佐々木「ああ、もう！何で僕が……！」

とぶつぶつと文句を言っている

ギン「おっい！佐々木くん！」

佐々木「えっ、先輩!？」

どこからともなくギンの声が聞こえる

佐々木「先輩っ！どこにいるんですか?!」

佐々木君がキョロキョロと辺りを見回していると、玄関ホールから声がする

佐々木「えっ、？」

ギン「佐々木君ー、ここだよー！」

玄関ホールにギンが立っていたのだ。

佐々木「ちよっ！先輩!!何で中に!!」

ギン「いや、だつて窓開いてたし、」

扉を開けながら言つた

佐々木「いや。でもっ」

ギン「良いから入りなよ。早く！」

佐々木「えっ、あ、はい！」

佐々木君は少し戸惑いながらも入っていく

ギン「確かここだよね？」

佐々木「はい、1年生教室前廊下なので、ここです」

ギンは佐々木君の言葉を聞いた後、低身長には似合わない大きなカメラで写真を一枚撮つた。

ギン「あれ?、何も写ってないよ」

佐々木「当たり前じゃ無いですか、僕達以外誰も居ないんですから」

佐々木君は呆れた顔をして言つた

ギン「ここにお化けが出るって言つたの君じゃ無いか！」

佐々木「言つて無いですよ！用事無いなら帰りますよ」

ギン「ちえつ、わかつたよ」

ギン達は玄関に向かつて歩いて行つた。歩いてるときに佐々木君は違和感を感じたらしく

佐々木「先輩、ここの廊下つてこんなに長つかつたですかね？」

と不安な顔をして言つた。

ギン「この学校広いし、こんなもんだよ」

佐々木「そう…ですよね」

と佐々木君はまたもや不安ように返事をした。

10分位立つた頃

佐々木「先輩！やつぱりおかしいですよ！何か後ろから近づいてくる気配しますし！」

ギン「それは私も気づいてるけど………どうしよう……」

2人が話している間にも2人の歩く速さに合わせて足音が近づいてくる

佐々木「ちよつ！先輩！近づいてきますよ！先輩こう言うの好きですよね！足止めとかしてくださいよ」

ギン「そう言うのは後輩がやる事だよ！さあ、佐々木君！早く足止めをするんだ！男

だろ!!」

2人はパニックだったのか少し歩く速さが速くなり喋る速さも変わっている、すると後ろから助けてと言う小さな呟きが聞こえた

佐々木「先輩!今……」

ギン「うん、助けてって聞こえたね」

ギンは目を瞑った状態で後ろを振り向いた

佐々木「な、何をしてるんですか!先輩!」

ギン「いいから、黙ってて」

そう言うのとギンはカメラを構えてフラッシュを炊いた

すると足音と声は聞こえなくなった

佐々木「え……」

ギン「ふう、良かった。夜にしか出ないって聞いたからもしかしてと思ったんだけど、光に弱いんだね」

ギンは目を開けながら尻もちをついて言った

佐々木「先輩、何してるんですか!早く脱出しますよ!!」

ギン「何言ってるの、まだ行方不明の子見つけてないじゃん」

佐々木君はまだパニックだった状態が続いているのか少し慌てていたのにも関わらずギ

ンは冷静に言った

佐々木「でも！」

ギン「でもじゃない！早く追いかけるよ！」

ギンは佐々木君の手を引つ張りながら足音が消えた方へと走った

佐々木「ちよつ！先輩、こんな端まで来て何をしようとしてるんですか？

！」

ギン「ここ怪しいんだよ」

ギンが指を指した所は一見何もないがその壁を叩いてみると他の壁とは違う音がしている。それはまるで誰かが歩いていっているような音だ

佐々木「この壁、中が空洞なんじゃないか。」

佐々木君は壁をノックをするように叩くと確かにコツンコツンと歩くような音がする

すると壁から二つの腕が出てきた、

佐々木「うわっ!!」

腕は佐々木君を掴み壁に吸い込もうとしている

佐々木「何ですか!!これ!!壁に!!」

ギン「落ち着いて佐々木君!そんな時はヒッヒッフィーだよヒッヒッフィー」

佐々木「ヒツヒツフーじゃ無いですよ先輩が落ちついてください!!!」

佐々木君は何とか窓に掴み手から逃れようとする

ギン「佐々木君待つてね! 何とかするから」

佐々木「早くしてください!!!」

ギンはバックの中から何か使えそうな物が無いか探している

ギン「あつた」

と言つて手鏡と木の棒を出し、

ギン「これでもくらええ!!」

と言いながら木の棒で壁を殴つた。

すると腕が佐々木君を手放してギンに襲いかかった

ギン「うりゃ!」

と声を出しながら手鏡を壁に向けたすると手鏡から腕が出てきて壁から出た腕を掴んで鏡の中に吸い込んだ

ギン「ハアハア、やつた」

佐々木「どうなつたんですか?!」

佐々木君は何がどうなつたか分からないと言う顔をして質問をした

ギン「これはね、無限回廊つて言つて無限に廊下が続く怪談何だよ。しかも後ろを振

り向くと何かに連れて行かれるって話なんだ。だから鏡を向けたら鏡の中の壁を目の前にある壁が見たことになるから逆に鏡に閉じ込めれるって思ったんだけど成功したみたいだね」

ギンはやりきったぞー！と言う顔をして言った

佐々木「とりあえず一度帰りましょう」

ギン「だね」

ギン達は廊下を歩きながら玄関についたが何も変化は無かった、いつものほんの少し長い廊下に戻っていたのだ、すると靴箱の近くに行方不明の子らしき生徒が倒れているでは無いか！佐々木君達は廊下とは反対側の事務室にいる先生に生徒が倒れていると言った、先生は驚いて、警察と病院に連絡して、その夜は警察やら救急車等が来て大騒ぎになった。勿論勝手に学校に侵入したギン達もこっぴどく怒られたが何とか目を瞑って貰い無事家へと帰った。

次の日佐々木君は理事長の部屋に行き、二階の廊下の端の壁がおかしいと話して先生達を見ると綺麗に穴が開いていたのでその日中に工事を済ませたがその壁からは誰かの遺体が出てきたので大騒ぎになった。なぜそんなところから遺体が出てきたのかは誰も知らず、この件は幕を閉じた。

佐々木「はあ、事情聴取とか初めてされたな、昨日と今日でもの凄く疲れたなあ、で

もまあ、もうこんなことも無いだろうから忘れよ」

と言いながら背伸びをしながら今日も1人で帰ろうとしている。

すると佐々木君は旧校舎の方を向いて数秒の間見つめて何を思ったか知らないが走りだした佐々木君は旧校舎に入って新聞部と紙に大きく書かれている部屋の前に立ち止まった

佐々木「……………よし！」

佐々木君は勢いよく扉を開け、イスに座ってクルクルと回っている髪を二つに括った自分よりも遙かに小さい少女の机の上にバンツ！と音を立てて紙を置いた

ギン「どうしたの!?急に!!」

佐々木「これ、」

佐々木君は少し恥ずかしそうに言った

ギン「これ、私が昨日渡した入部届けじゃん!!」

佐々木「だから、入部にきたんですよ、」

またもや恥ずかしそうに言った

ギン「いいの!本当にいいの!!」

佐々木「だから、入ります！」

ギンはやったー!と子供みたいに喜びながら入部届をポケットにしまった。

ギン「じゃあ、早速この怪談広めてよ」

佐々木君は不思議そうに言葉を返した

佐々木「どんな怪談ですか？」

その内容とは旧校舎の入口にある靴箱に幽霊に困っていると言う内容の紙を入れると解決してくれると言う怪談？だ

佐々木「それ怪談何ですか?！」

ギン「いいから！いいから！早く広めてこーい!!」

そう言う佐々木君を部屋から出した。佐々木君はため息をつきながらも本舎に向かった。

この日から佐々木君とギンの奇妙な日常が始まった

竜堂学園七不思議その2 人形さん

僕の名前は佐々木翔(ささき かける)、特に何の変哲も無いただの高校生だ。進学校に受かつて晴れがましいリア充生活を満喫できる!と思つたのに……

佐々木「畜生お!何であんな部活に入ったんだよ僕はああ!」

と嘆き悲しんでいる最中だ、本当に何であんな所に入ってしまったんだろうと、思いながら僕は旧校舎へと向かった。旧校舎の一番奥にある扉に大きく新聞部と書かれた部屋が僕が入っている部活の部室だ。特にこれと言つた特徴のない部活だが、問題は中身だ。とナレーター気分いつものように僕は扉を開けた。そこには髪を二つに括つた僕より遙かに小さい、いくら制服を来ていても小学生と見間違えるような少女が熱心にパソコンのキーボードを打っている。

佐々木「先輩、どうしたんですか?!その隈」

確かに少女の目のしたにはくつきりと隈(くま)が出来ている。

ギン「最近寝て無くてね。学校新聞明日までに作り上げないと、」

。 僕の目の前にいる女の子は白露 銀先輩と言つて怪談好きな新聞部の部長だ

佐々木「先輩……新聞作れるんですか！」

ギン「作れるよ！これでも新聞部部长だよ」

先輩は強く喋りながらも指を動かして、キーボードを打っている

ギン「で、怪談探してきた？」

と低く今にも死にそうな声で問いかけてきた

佐々木「いやっ探してませんけど」

ギン「じゃあ、探してきて」

いつもとは違う声に僕ははいとだけ返事して部屋を出た

佐々木「それにしても、怪談探せ！って言われてもなあ、」

と僕は呟きながら、大好物のコルネを買いに売店へ向かった。

佐々木「コルネないかなあ」

僕は売店でコルネを探している時に隣で話している女子生徒達の話が聞こえた

女子生徒A「ねえねえ、人形さんって知ってる？」

女子生徒B「何それ？w」

女子生徒A「噂で聞いたんだけどさ、片手に四肢と耳がちぎれた兎の人形を持っていて女の子が夜な夜な旧校舎と本舎を歩き回ってるんだって」

女子生徒は怖そうに喋っていたがあんな体験をした僕にはあまり怖くは無かった

女子生徒A 「しかも片手には大きな鋏の片方を持つているんだって！w」

女子生徒B 「何それw怖いw」

と軽々しく言っているが本当に幽霊はいるんだ、と見せつけられた僕にはもしその幽霊に出会ったら怖いなんてものじゃないと思っただけなら鳥肌がたつたのでコルネを買い新聞部へと走った

佐々木「ハアハア、何で……購買から旧校舎ってこんなに……とおいの……ハアハア」

僕は先輩、探してきましたと小さく言いながら部屋に入った。すると、先輩からの返事は無い。びびき声だけが聞こえた先輩は気持ち良さそうに机にうつ伏せて寝ているのではないか。あげくの果てに

ギン「もうそんなに聞けないよお」

とまで寝言を言い始めた

佐々木「ハア、夢の中でも怪談聞いているのかな、」

とため息をつきながら言っただけで椅子に座った、疲労がたまっていたせいも少しづつ目を閉じて遂には寝てしまった。

何時間寝たんだろうか、初めは仮眠だったつもり何だけど気がついたらもう夜だった佐々木「はあ、先輩、起きてください。」

ギン「むにやむにや……」

体を揺さぶつても中々起きないから僕は

佐々木「先輩！あそこにお化けが!!」

と大きな声を声で先輩の耳に向かって言った。すると

ギン「どこどこ!」

と飛び起きて辺りを見回した

佐々木「いませんよ。そんなことよりもう夜ですよ。早く帰りましょう」

ギン「分かったけど、ちよつと待って、」

先輩は耳を澄ませるかのように手を耳に当て何かを聞いている

ギン「何か物音しない??」

と言つてきたので僕も耳を澄ますと確かに床に何かを擦る音が聞こえる。考えていると音は段々と近づいてくる。

佐々木「あの?これ……」

僕が戸惑っていると先輩は何かに怯えるような顔をして「はやく!こつち!!」と言いながら僕の手を握り、少し大きなロツカーに入った

佐々木「つ先輩?」

と聞いても小声で「静かにつ」や「黙つて」と言っている。その声が真剣だったため僕も黙ることにした

ほんの少し立った頃だろうか床を擦る音が消えた。と共に僕は安心感を持ったが先輩は真剣に息を浅くゆっくりしている。僕が

佐々木「先輩もう出ましようよ。狭いですし」

と小声で言った瞬間、バゴンツ！と言う物凄い音がした。その音に合わせて先輩が僕の口に手を抑えた

佐々木「先輩、分かりました」

僕もさすがにここまで来ると僕も察したので小さく呟いてた黙った。

五分位たった頃だろうか、今度は小さな足音共に床を擦る音は遠ざかって行った。僕と先輩はロツカーから静かに出た

ギン「ハアハア、」

佐々木「ハアハア、先輩さっきのは？」

僕はまだあの音が少し聞こえるので小さな声で言った。

ギン「君、人形さんって知らないの?!」

佐々木「え、しつてますけど」

ギン「なら、話がはやいね」

僕は正直驚いている。前にも幽霊は見たはずなのに、こんなにも怖いと感じたことは一度もない。

佐々木「でも、おかしいですよ。僕は小さな女の子だと聞きましたけど、そんな小さな幽霊が例え木だとしても扉を壊せますか？」

確かに普通に考えればそうだ、いくら幽霊でも女の子が扉を一瞬で壊せる筈がない
ギン「ああ、そうか。佐々木君は鋏を持っているって聞いた？」

佐々木「はい」

ギン「人形さんの鋏はね。こーんなにおおきいんだよ」

先輩は子供が大きさを表すように窓の所から約1m50cm程の場所に手をついた。

佐々木「え、でもそんなに大きな鋏女の子が持てますか？」

ギン「だから、引きずってるんだよ」

僕はそれで納得した、でも一つだけ疑問があるそれを言おうとした瞬間「見イつケた」
とリズムよく聞こえた。

ギン「佐々木君！」

と言いながら僕の手を先輩は引つ張った。

すると物凄い音と共に小さな女の子が大きな鋏の片方と共に壁を破壊してきた。鋏には血がついているのに気づいた僕は恐る恐る自分の腕を見たすると、幸い切断とまではいかないが綺麗に肘から腕の付け根まで綺麗に切り傷になっている。白い身がゆつくり赤くなつていき、血がポタポタと床に落ちた

佐々木「うわああああ!!」

僕は思わず叫んでしまった。人形さんはその悲鳴を待っていたかのように素敵な笑みを浮かべた。

ギン「逃げるよ!!」

先輩は僕を掴み引きずって行った。それを人形さんは鬼ごっここの鬼が時間を数えるように立ち止まっていた

ギン「ここくらいで良いかな。」

そこは旧校舎一階の西側新聞部とは反対側だ。

ギン「佐々木君?大丈夫??」

佐々木「大丈夫です。さっきは済みませんでした」

ギン「そんなことより、人形の四肢と耳を探さないと」

先輩は立ち上がり部屋を物色している

佐々木「あの?」

ギン「佐々木君も!早く!」

佐々木「はい!」

僕たちは必死に探した。以外にすべての人形パーツを見つけるのは簡単だった。移動中に人形さんにも見つかりかけたが上手くかわして鉄の片方も見つけた、しかし

佐々木「ハアハア」

ギン「佐々木君大丈夫?」

僕は探すことに夢中になつていたため、出血していることを忘れて廊下に倒れてしまった

ギン「包帯持つてたと思うから動かないでね」

先輩は僕に包帯を巻いてくれた。止血と言うよりはただ強く巻いて血が出るのを防いだけだ。包帯を取ればまた出るだろう。すると床を擦る音が聞こえた。今、この廊下に人形さんがいる、そう確信出来る音だ。実際に人形さんが、廊下の先に見える。

ギン「これを渡せば、」

先輩は。パーツを人形さんの足元に投げに行く。四肢と耳を投げ終わった時、人形さんは鳴きながら四肢と耳を手に取り、兎の人形につけていく。人形さんは鋏を手から落とし、人形だけを残して消えた。

ギン「やったの、かな?」

何も起こる様子はないだったので先輩疲れた顔をしてこつちを向いた。その時、僕はあの物を見てしまった

佐々木「先輩!後ろ!」

ギン「えっ」

何と、人形が立っていたのだ！しかも鋏まで持っている。

ギン「ちよつと待って、去年と結末が違うなんて……………」

先輩は僕には聞こえない声で何かを言っていたがそんなことはどうでも良い。あいつを何とかしないと、

佐々木「先輩、逃げてください。僕が足止めをしますから」

ギン「今の君じゃ無理だよ。」

先輩はそう言ったが僕は立ち上がって鋏の片方を取った

佐々木「大丈夫です。先輩！」

先輩は慌ててたが僕は人形の目の前に立って中段に構えた

人形が物凄い勢いで飛んで鋏を振りかざしたが僕は刃で受け止め、その勢いで返して綺麗に人形の首を切り落とした。その首は先輩の足元に飛んで言った。その先輩は

ギン「おお!! 格好いい!! どうやったの? どうやったの?!!」

と子供の用に 飛び跳ねている。

僕にはその声の後に先輩では無い幼い声がありがとうと聞こえた。

佐々木「はあ〜」

ため息をついて先輩の所へと歩いていった、

ギン「さっきの凄かったよ!!」

佐々木「小さい頃剣道していたので」

と先輩に説明していると「畜生！あと少しで殺せたのによお」と男の声が聞こえる。それは僕だけでは無く先輩にも聞こえている用だ。その声の主は下にある、人形の口がパクパクと動いてるでは無いか。

人形「体とくつついたらまた殺しにかかってやるから覚悟しろよ餓鬼共！」

と人形が言った。そして先輩には言つてはならない言葉まで。

人形「この女も子供見たいに怯えやがって、楽しかったぜ。パンツも子供じみた、くまち……ごぶあー！」

と先輩は人形が言い終わる前に人形を踏みつけた。

ギン「それ以上言うとぶち殺すぞ。」

その顔はまるで般若のような顔で声を聞いただけで分かるこの威圧感是人形さんを超えていた

先輩は針と糸を出して人形の首を縫いつけた

ギン「これでくつつかないね。」

と言いながら人形の口を抑えた

ギン「救急車よぼうか？」

佐々木「いや、良いです。後で行くので」

と言うと僕たちは学校でて、先輩は髪が長く背が高い先輩とは、真逆の見ただけで大人だと分かる人多分お姉さんだと思うけど、その人に怒られながら人形を持って帰って行った。ぼくは急いで病院に行ったが医師に驚かれて理由を聞かれて、凄く大変だった。部屋の壁が壊れかけてたから直そうとしたら逆に壊してしまい腕を切ってしまったと話したらすんなり信じてくれた。そして治療が終わってから家に帰り、寝て次の日授業が終わり新聞部に行くと部屋の前で先輩が待っていた

ギン「おーい!!」

佐々木「先輩? どうしたんですか?」

ギン「実はね! 部屋が改築されました!!」

佐々木「おお!」

先輩は扉を開けてどうだと言わんばかりに見せてきた。それはただ隣の部屋との壁を壊し繋げて家具の場所を変えたただけだと見ただけで分かる。しかもソファアの、上には兎の人形の頭が置いてある

人形「よう! 佐々木と姐さん!」

ギン「ようー!」

佐々木「姐さん?」

先輩の乗りも気になったが人形の姐さんと言うのが気になった。

人形「姐さんは姐さんだろ。クソ佐々木」

ギン「そんなこと言ったら駄目だよ。 玄さん。」

人形「分かりました！姐さん！」

僕は昨日から思っていた違和感をここで言おうと思い、

佐々木「あの？、先輩話があるんですが？」

ギン「なにになに？」

玄さん「ああ!？」

僕は昨日から思っていた違和感をここで言おうと思い、

佐々木「先輩は何であんなに人形さんのことについて知っていたんですか?!」

ギン「……………」

玄さん「それは姐さんが怪談が好きだからだろうが！」

僕は玄さんの言葉を無視した。すると先輩は急にブラウスを脱ぎ始めた

佐々木「ちよっ！先輩！」

玄さん「姐さん?!」

先輩はブラウスを脱いで背中を見せてきた、そこには左肩から右腰の端にかけて大きな傷が会った。傷を見せた後先輩は急いでブラウスを着た

僕は驚いて声も出なかったが何とか、

佐々木「先輩、その傷……」

と言った。

ギン「私が入学したての頃、新聞部の皆で、まあ私を合わせて四人しかいなかったんだけど夜まで残って新聞を仕上げていたんだ。するとね床を擦る音が聞こえてきてその後人形さんに会って皆生き残ったんだけど私だけ大きな傷が出来てね。それで……」

場が凄く気まづくなつた。玄さんすら喋らなくなつた。すると先輩が

ギン「そんなことはどうでも良いんだよ!!!これとこれ!各場所の掲示板に、貼つてきて玄さんと一緒にだよ。ほら早く!」

僕たちは外に出された。何でそんな怖い思いをしたのに怪談に思いを入れるんだろ
うかと疑問が出たが先輩は変な人だから仕方ないと言う答えになつていない答えを自
分に言い聞かせながら玄さんを抱えて掲示板に走つた

竜堂学園七不思議その4 番犬チル前編

夜10時頃竜堂学園では、事務室で作業をしている男性がいた、その人は

「ああ、電気消して帰るか！」

と言って部屋を出ると事務室の反対側の廊下に何かが動いているような影が見えた。その夜は月明かりがとて綺麗で満月に近い形をしていた。月明かりで影が見えたのだ。その影は物凄いスピードで動いているのが分かる。その影は角を曲がりこちらに近づいてくるがはつきりと分かった。男性は走り出した。男性は後ろに何かがあると言うことだけは分かったがそれが何かまでは分からなかった怖すぎて振り向けなかったのだ。男性は校舎から無事に出た。後ろを振り返ると何もいなかったのでため息共に安心感が出た。その時体に痛みが走ったのだ。痛みのもとを探すと右足の太股から外側に食いちぎられた傷が出来ていた。その傷から紅い液体が勢いよい良く出ると同時に男性は叫び声を上げて倒れた。

次の日

佐々木「先輩聞きました？パチンツ」

ギン「何を？パチンツ」

佐々木「事務室の管理人さんが昨日学校で何かに襲われた件ですよ。パチンツ」

ギン「あー、その事ね。パチンツ」

と二人はのんきに将棋を指しながら話している、そしてギンが「その事なら先生達の方から手紙届いてるよ」と

歩を指しながら言った。

佐々木「僕は貰ってませんよパチンツ」

と言うと

ギン「だって怪談部宛だからね。パチンツ」

佐々木「えっ……！」

佐々木君の手が止まった

ギン「多分、校舎内で起こった事だし、襲われた本人の、発言も曖昧だから、警察も取り入ってくれなかったから最終的に噂でも信じるしか無かつたんだろうね。今日下駄箱みたら入ってたんだよね。」

と言うと「これ詰んでるね」言いながらソファーに寝転んだ。

佐々木「で、先輩は調査でもするんですか？」

と悩みながら聞くとギンは「用事あるから調査お願いね」と言つて立ち上がった
佐々木「えっ！ちよ！何で」

ギン「今日一日だけ玄さん貸してあげるから」

ギンは、机の上でのんびりと日向ぼっこをしている玄さんを佐々木君の膝の上に置いて、部屋を出て行つた。

玄さん「ちよっ！姐さん？」

玄さんは「こんな奴と一緒だなんて嫌ですよ！姐さん冗談ですよ！姐さん！！」と叫びながらじたばたしている。佐々木君は「はあ」と言いながらメモ帳とペンをポケットに入れ家に電話を掛けた。

夜九時頃、佐々木君は怯えながら玄さんを抱いて校内を探索していた。

佐々木「まさか、親からOKもらえるなんて……………」

佐々木君は後悔しながら歩いている。

玄さん「まあ、ドンマイ。……」

するといきなり

玄さん「おい！佐々木!!獣の匂いがするぞ」

とクンクンと玄さんの鼻がなった。すると確かにたつたつたつ！と足音が聞こえ、はあはあ、と獣のような息使いの音が聞こえる。佐々木君は全速力で逃げた。

竜堂学園七不思議その4 番犬チル中編

佐々木「う……………ここは」

辺りは真つ暗で灯りは一つもない。よく見ると薄汚れた壁に段ボール箱や木箱、絵画等がおいてある。だが、玄さんらしき人形は見つからなかった。

佐々木「う、何で僕はこんな所に……………確か先輩の頼みで学校を探索していて、何かに追いかけてから……………そこから確か……………」

回想

僕は何かから走って逃げていた。

佐々木「なにあれ！ハアハアあれが管理人さんを襲った犯人!?」

玄さん「多分、そうだろうな。犯人と言うよりは犯獣じゃねえか」

と玄さんは笑いながら言うけど今は笑えない!!玄さんを持って走ってるのは僕なんだからすぐく疲れる。

僕は二階へ行き三階へ行き六階まで行った。だが獣のような何かはずっと追いかけて

てくる。もうトラウマになりそうだ。疲れてきたもう諦めようと思ったとき

、
玄さん「佐々木！その部屋、入れ！」

えっ？と答える僕に玄さんは「早く入れ！」強く言ったから僕は止まってその部屋に入った。

回想終了

佐々木「そうだ！あの時だ。」

佐々木君は納得して、壁等を叩いている。「ホラゲーとかなら壁とかを皿で削れるんだけどな」と苦笑しながら言っている。

佐々木「どこにも扉なんて見あたらないよ。部屋に入ったから絶対に扉があるはず何だけどなあ。」

佐々木君は壁を蹴ったり、段ボール箱を除けたりして出口を探している。すると少し光の線が見えた。佐々木君は「ん??」と言って近づいてその光の辺りを見るが何も光を出す道具なんてないと思ふと上を見上げた。

すると

佐々木「えっ！あれって!!」

そこには確かによ人間の目が大人一人は通れそうな小さな扉から覗いているのが見えた。その目は僕と目があつた瞬間バツ！と後ろに下がって身を隠し小さな扉を閉めた。

佐々木「あそこに出口が……」

佐々木君が立っている場所から出口までは約5メートルくらいある佐々木君が170cmだから全く届かないのだ。

佐々木「どうしよう……段ボール箱を置いて届かないかな。でもすぐに底が抜けそう」

と一人でブツブツ言いながら色々試しているが時間がたつにつれて少しずつ諦めて行った。何をやっても届かなかったのだ。

佐々木「はあ、結局見つかったのは小さな排気口だけだし、段ボール箱は、全部中身がないから底が抜けるから、ダメ出し……こう言う時先輩ならどうするだろうか」

と言っていると上から何かが落ちてきた。それは凄く見慣れた物でいつも触っている物だった

玄さん「いてててつ、」

佐々木「玄さん!!!」

その時の佐々木君にとつては何よりも頼れる物だったのだ。

玄さん「よう! どうした!」

佐々木「生きてたんだね!! 良かった。」

玄さん「泣くなよ。てか元々生きてないし」

佐々木君はそうだったねと言いながら泣き止んだ

佐々木「玄さん! 頼みがあるんだけど」

玄さん「ああ、分かってるぜ!」

一人と一匹? は心が繋がってるかのように二、うなずき声を揃えて

佐々木・玄さん「ここから脱出するぞ!」

と言った。

玄さん「で? 格好つけたのはいいが、何か考えてるのか?」

佐々木「それが考えてないんだよね」

玄さん「やっぱお前は佐々木だよな!」

佐々木「どう言う意味!?!」